

特別講演 今後の学会の在り方と高気圧酸素治療

柳下和慶

日本高気圧環境・潜水医学会 代表理事

1966年に世界に先駆け第1回高気圧環境医学研究会が発足し、1968年日本高気圧環境医学会となり、以降高気圧酸素医学と潜水医学、高気圧酸素治療(HBO)をキーワードとして発展した。潜水医学の基盤となる学会であり、また放射線照射による晩期障害などHBOでなければ対応できない疾患群の臨床、研究を主導するなど、日本の医療医学の重要な一端を担ってきた。また、海外の代表的学会であるUndersea and Hyperbaric Medical Society (UHMS)は1967年、European Underwater and Baromedical Society (EUBS)は1971年に設立されたことから、日本が世界をリードしてきた歴史がある。そして、2004年に日本臨床高気圧酸素・潜水医学会が新設され、2009年には日本高気圧環境医学会は日本高気圧環境・潜水医学会へ名称変更され、現在に至っている。

また、2017年の診療報酬点数改定により、以後第1種および第2種治療装置は全国的に増加し、専門医試験の受験者数も増加傾向など、微増ではあるものの全国的なHBOの診療機会は拡大しているといえる。

一方で、HBO研究については若手研究者の参画が伸び悩んでおり、魅力的な研究課題の開発が強く望まれ状況である。減圧症や潜水医学の研究者や医師の養成や発掘、放射線障害などHBO固有の治療対象でのエビデンスの蓄積と研究成果の発信、スポーツ外傷に対するHBOなど先駆的取り組みの発展、学会研究基金の設立や活用、学会誌投稿の量・質の充実、基礎研究の施設間での協力体制の強化や発信が望まれる。また、本学会内に限定せず関連学会へのHBO研究の発表や広報、関連学会でのHBO研究発表者との連携などが望まれる。

また臨床、研究のみならず、教育や安全対策や社会へ広報活動など、今後の学会の在り方としての多くの課題がある。

2021年4月より、臨床工学技士の養成校では、

HBOについて教育必須項目から除外された。国家試験ではHBO関連の問題が出題されてはいるものの、新臨床工学技士のHBOの知見は極めて限定的となり、卒後教育、現場教育が極めて重要となる。臨床工学技士に対するHBO卒後教育について、学会はより多くの役割を担うことが必要であろう。潜水医学や海洋関連の医療医学について、セミナーや一般公開講座など、社会に向けた教育や広報の機会を増やすことも必要であろう。HBO担当臨床工学技士のための卒後研修システムの体制整備や再構築は急務と考える。

1996年の山梨での第1種装置爆発事故以来、HBO関連の重大事故は幸い発生していない。しかしながら、「そろそろ危ない!」との危機意識は極めて重要であり、学会としての安全対策強化活動が必要である。

国際交流についても、コロナの影響で一旦は活性が低下したが、改めて学会主体の交流も図り、魅力のある学会とすることが望まれる。また関係団体との交流や連携強化も望まれる。第2種装置の地域偏在や、潜水関係の法規・規則変更など、政策対応も学会として任務となる。

2022年10月に開催された、日本高気圧環境・潜水医学会学術総会、日本臨床高気圧酸素・潜水医学会学術集会の合同学会では、「2学会の合併について」のアナウンスメントが両学会から公表され、2024年4月の学会合併を目標とすること、学会活動の連携強化を目的とすること、共に足並みを揃えて協力的に進めることが発表された。両学会の定款に記載されている目的を比較してもほぼ同じであり、潜水医学や高気圧酸素医学に関連する学会をひとつとし、HBO研究や臨床に携わる関係者のエネルギーや知見を結集し、新たな活力ある学会を目指すことは、極めて重要と考える。

現在、2学会合併について協議が進んでおり、学会の皆様のご協力のもと魅力ある新たな学会のスタートを目指したい。